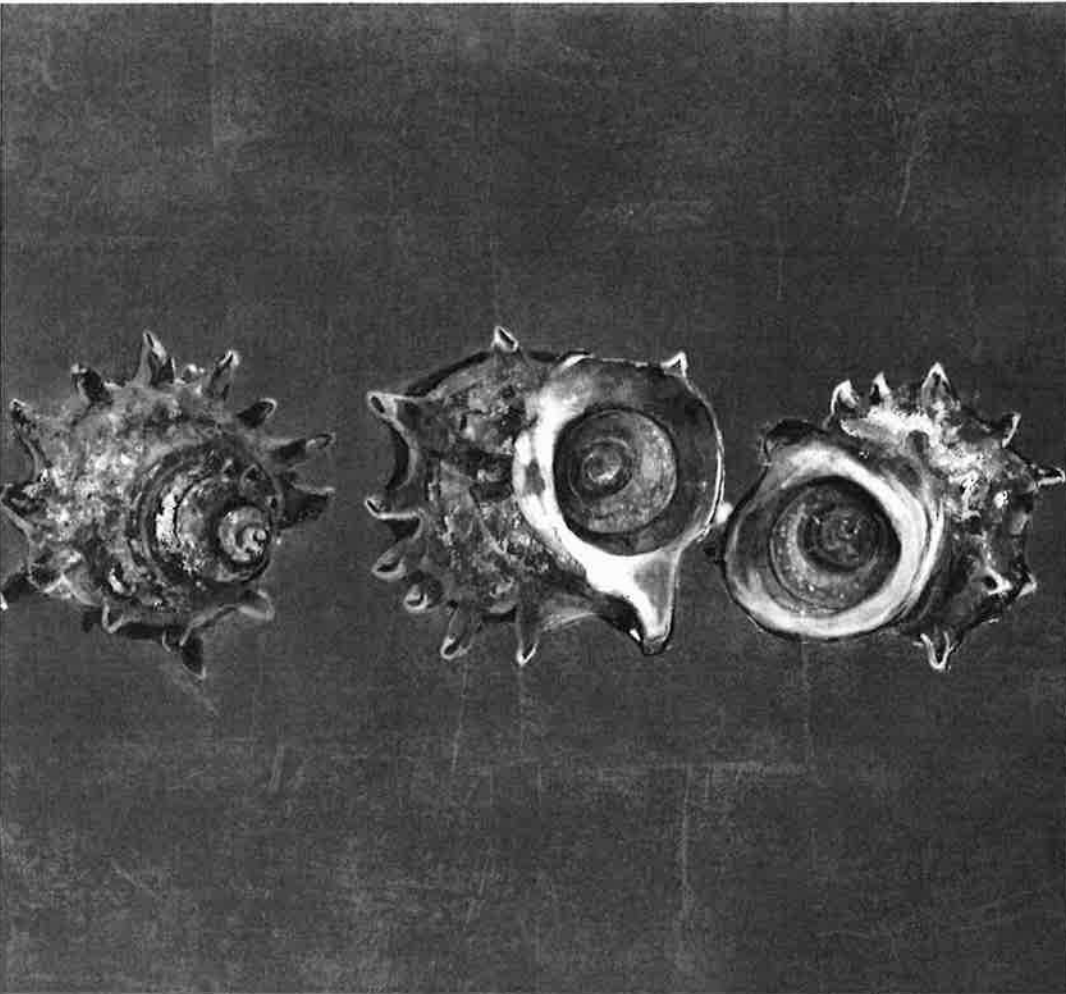


# 文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可  
令和元年八月一日発行(毎月一回一日発行)  
第九十七巻第八号(七月十日発売)

**徹底討論** 年金崩壊すべての疑問に答える

八千草薫がん闘病手記/家族という病 橋下徹 佐藤優 他 八月特別号



# 将軍の世紀

やまうちまさゆき  
山内昌之

武蔵野大学特任教授・  
東京大学名誉教授

## 第二十回 下馬将軍の「曲がった道」

家綱政権下、筆頭老中に躍り出た酒井忠清。「驕慢」「不忠」との悪評もあった男の実像とは――。



### 一、イスラーム統治論から見た家綱

八世紀のイランの名文家イブン・アルムカッファは、王者に望ましい性質として、怒り、嘘、吝嗇、憎悪の感情を持たず、みだりに誓いを立てないことを挙げた。さらに十四世紀のイル汗国のイブン・アッティクタカーはこの五つ以外に、性急さ、嫌気、倦怠、退屈の欠如を挙げた（『アルファフリー』1）。イブン・アッティクタカーのいう「最も有害な性質」や「最も腐敗した状態」からいけば免れていた歴代の徳川将軍は、地味ながらも欠陥の乏しい四代家綱ではなかったろうか。

六歳の竹千代と幼い近臣が山王祭礼を真似して戯れた時のことだ。御次に控える六十歳がらみの加々爪半之丞は屋敷が山王に近く真似をさせたらよいと近習が言い出した。家綱は半之丞の迷惑顔を見て事情を察しその場を去らせた。近習らには「人の迷惑する事を我れ面白しとて、さすまじきぞ」と注意した。また家綱の温和な人柄を思わせる二つの逸話がある。彼は遠島の囚人も殺さずにいざれ赦免されるなら、「其島に食物なくば定めて餓死すべし。不便なる事なり。如何なれば扶持せられぬぞ」と疑問を呈した。父家光はしみじみ感心し、家綱仕

置きの初めとして向後扶持を与えよと代官に下知した。将軍として天守閣に上がった節、側衆が慰みに遠眼鏡を再三供したが、使わなかった。自分は幼少なれど将軍である。いま四方を目鏡で見下すなら、「将軍は毎日矢倉へ上り、江戸の模様を見下すなどといはば、諸人の苦み如何ばかりぞや」と語ったというのだ（『武野燭談』巻之五）。ところがイブン・アルムカッファの基準にも適う家綱

の美質は、むしろ身体虚弱や政務能力の低さの結果とされ、ほかならぬ幕府正史の『徳川実紀』でも評価は低い。「惜しむべきは、御生来お体が御丈夫ではなく、御病気がちであられたので、政務はすべて権臣に委任なされ、多くは御自分で政治向きのことをお聴きになられぬので、権力を弄ぶ輩が大変に威力と福德で服従させ、将軍の威権をおおいかくす気風が生じ、下々に将軍の言葉が通じることが稀になった。いかにも寛容で慎み深い徳がおありでありながら、その慈しみと恵みが左右の臣下にとどまり、徳政が限られた圏内に留まるとして嘆く者たちが少なくなかったと聞く」（『厳有院殿御実紀』巻六十一）。これはあまりにも家綱に酷な叙述ではないか。

「弄権の輩すこぶる威福をばり、権蔽の風おこり」とは、下馬将軍と綽名された酒井忠清の専権を指すのだろう。その名は役屋敷が江戸城大手門下馬札前にあり、下

乗・下馬する面々が忠清を敬する形になったからだ。「下言通ずる事まれなり」とは家綱が政務を執らなかつたと言いたいのだろう。しかし、家綱は病がちでも政務を直接に指示することが多く、明暦三年（一六五七）から延宝四年（一六七六）まで二十年間、『徳川実紀』には連年、「面命」（懇切に教え諭すように命じる）の記事が現れる。大目付と目付による役人監査の強化、寺社・勘定・町三奉行への職務精励の訓示、諸番頭への番士督励の命令など、役人と番士の振粛を地味ながら図っていた（辻達也『江戸幕府政治史研究』）。明暦の大火復旧のための財政出動や寛文八年（一六六八）の儉約令は、徳川幕府を安定させた家綱の功績でもあるのだ。

恐怖政治も辞さなかった家光の死とともに、松平信綱や阿部忠秋ら将軍近臣が押さえていた「奉行所」（幕政中枢）の吏僚構造が弛緩し、譜代と外様を問わず大名を統括するシステムも多少揺らいだ。家綱政権になると、譜代・旗本の家計窮乏と、外様との身分差縮小が譜代大名らに不満を呼び起こし、酒井忠清を頂点とする「門閥譜代」のまきかえしを促したという説もある（朝尾直弘『将軍権力の創出』。寛永十五年（一六三八）十一月の土井利勝と酒井忠勝の大老就任は、松平信綱・堀田正盛・阿部忠秋ら家光側近出身の老中が幕政中枢を掌握した結